

英語史覚え書 ― ゲルマン人、ノルマン人ゆかりの地への旅 ―

今 関 雅 夫

1. はじめに

言語は国や地域の様々な時期に起こった様々な出来事に反応し、大きくもまた小さくも変化してきた。その変化の中には、歴史的に遡ってみると、他民族による侵略や征服によるもの、社会や人々の考え方の変化によるもの、テクノロジーの進歩によるものなどがあり、いろいろな要因によって変化してきたと言える。イギリスの場合、先住民族がいたところに、今から 5,000 年ほど前にイベリア半島や地中海沿岸地域にいた巨石文化を持つイベリア人がブリテン島に渡ったのを皮切りに、2,600 年ほど前からケルト人、2,000 年ほど前にローマ人、1,600 年ほど前にゲルマン人、1,200 年ほど前にヴァイキング、940 年前にノルマン人といった様々な民族が入ってきた。ローマ人までは、それぞれの民族で使用されていたことばがブリテン島の主要言語であったが、ゲルマン人がやって来てからは、西ゲルマン語から派生した、他のゲルマン語とは異なる言語、英語（古英語）が生まれた。その英語がその後、ヴァイキング、ノルマン人の侵略などを経て中英語へと変わっていくのである。

英語史に関心がある者として、英国史・文化にも関心があり、その出来事があった場所、その人物がいた場所を訪れ、歴史の空気に触れたいという思いがあり、今までにも、ルーン文字が十字架に残るスコットランド南西部の Ruthwell Church、北部に封じ込められていたケルト人の一部族であるピクト人（L. painted men = 刺青をした人々）の侵入、南下を防ぐために設けられた Hadrian's Wall、793 年からヴァイキングの度重なる襲撃を受けた Lindisfarne 島（現在の Holy Island）等、多くの英国史・英語史ゆかりの地、旧跡を訪れてきた。現地へ赴き、その地の空気を吸い、風の音に耳を傾けながら、はるか昔の歴史的な場面に思い

をはせると、その時代にタイムスリップ (slip back in time) できるような気がした。また、そのような場所へ行くための下調べをしていると、史実かと問われると疑問符が付くが、歴史の中から生まれた伝説が伝承され、文化、風習の一部となってその地に息づいていることを知り、強く興味を惹かれたこともあった。

ここでは、平成 18 年 9 月に訪れたゲルマン人、ノルマン人に関する収蔵物を展示する博物館、遺跡、古戦場などの話を中心に、筆者が撮影した写真等を用いながら、イギリスの歴史、文化、言語に関する知見を述べたいと考えている。ゲルマン語、古英語、中英語の頃のイギリスやその時の言語事情に関心を持ってもらえれば幸いである。

さて、今回訪れた地や関連事項を通時的に見ると、ゲルマン人関係では、彼らが最初に上陸したところといわれる Ramsgate、アングロ・サクソン人の生活を体験できる West Stow Anglo-Saxon Village、アングル人最後の王エドマンドが亡くなった町 Hoxne、そのエドマンド王が聖人になり祀られている町 Bury St. Edmunds、ヴァイキング関係では、ノルマン人の征服を描いた Bayeux Tapestry、ノルマン人とハロルド軍の戦いが行われた Battle (Hastings) などを中心である。さらに、英語史に関連のあるその他の事項にも触れたい。(以下で用いられている写真は、断りが無い限り筆者が撮影したものである。)

2. ゲルマン人関係

2-1. Ramsgate

今から 5,000 年ほど前にこの島にきたイベリア人については、正に同時代人であると言えると思うが、ピラミッドを建設したエジプト人のように、巨石文化を持っていた民族であることは知られている。イギリスには、新石器時代、巨石時代に遡るストーンサークルの遺跡が大小合わせ今でも 1,000 ヶ所以上ある。彼らの後に印欧語族系の最初の民族としてケルト人が紀元前 600 年頃から紀元前 100 年頃にかけてブリテン島に侵入してきた。その後やってきたローマ人とは部族によっては良好な関係を保てたが、中には北部に追いやられたピクト人のように、略奪などのために南下を試みた部族もいた。ローマ帝国の弱体化と共に、これらの部族が手を振って南下し、略奪行為などを始めるに及んで、ブリトン人

は自ら進んでゲルマン人（ジュート人）に助けを求めるようになった。（助けを求められてゲルマン人がやってきたのではなく、西へ西へと移動していたゲルマン民族の大移動の最後の頃にブリテン島に来たという説もある。）この援軍要請に応じてやってきたのが、馬をシンボルとする二人の兄弟軍神 Hengest（Hengist と綴ることもある）と Horsa である。彼らが率いるゲルマン人の軍隊が、歴史上、初めてイギリスにやってきたゲルマン人ということになっている。そして彼らがブリテン島に第一歩を印した地がロンドンの東方、ケント州東南端に位置する Ramsgate 近くの Thanet 地区 Ebbsfleet（昔は島であった）であるといわれている。多くのイギリス人が「我らはゲルマン人の子孫」と言うなかで、この地をゲルマン人最初の上陸地と神聖視している人々も多い。

9 世紀にアルフレッド大王によって編纂された『アングロ・サクソン年代記』の 449 年の項には以下のように書かれている。（現代英語訳）

A.D.449 This year Marcian and Valentinian assumed the empire, and reigned seven winters. In their days Hengest and Horsa, invited by Wurtgern, king of the Britons to his assistance, landed in Britain in a place that is called Ipwinestfleet; first of all to support the Britons, but they afterwards fought against them. The king directed them to fight against the Picts; and they did so; and obtained the victory wheresoever they came. They then sent to the Angles, and desired them to send more assistance. （449 年 この年、マーシアンとヴァレンティニアンは帝国を治めることになり、7 年間統治した。この間、ブリトン人の王ヴォートゥゲルンから要請を受けたヘンゲストとホーサはブリテン島のイプウィネスフリートという地に上陸した。そして、最初はブリトン人を助けたが、後に彼らはブリトン人と戦った。王は彼らにピクト人と戦うよう指示し、彼らはそのようにし、行く先々で勝利を得た。彼らは、その後、アングル人に使者を送り、もっと多くの援軍を送るよう要求した。）

このイプウィネスフリート（Ipwinestfleet）という場所が Ebbsfleet であり、イギリス王国の祖である Hengest と Horsa がこの地に上陸したと年代記は記している。



(左の写真は現在の Ramsgate の海岸。現在は人口約 40,000 人の港町)

9 世紀に書かれた年代記がその 400 年前に起こったことを書いていのであるから、信憑性に欠けると考えられるが、日本にも『古事記』というものがあるように、神によって率いられてきた民族であるという、いわゆるお墨付きのような神話が欲しかったのでは、と思えば納得いく話でもある。さらに、「この地はゲルマン人最初の上陸地」と書いたが、実際には、4 世紀の終わり頃から 5 世紀の始め頃に、大挙してではないが、大陸からゲルマン人がブリテン島の各地に入っていたことは知られている。

2-2. Hoxne

エドモンド王が埋葬されている町 Bury St. Edmunds から北東へ直線距離にして 30km、この Hoxne（ホクスン）を訪れるのは十数年ぶりであるが、王に纏わる様々な記念碑がある小さな落ち着いた町である。前回訪れたときにも感じたのだが、この町の人々がイースト・アングリア最後の王 King Edmund を誇りに思い、町の人々にとって非常に重要な人物であったのだという印象を今回も受けた。この王の最期については帝京大学短期大学紀要第 23 号に書いたが、



古来地元に残る話によると、870 年、King Edmund はヴァイキング（Dane 人）と勇敢に戦ってきたのであるが、最後は追われる立場となった。王はこの村をほぼ南北に流れる Goldbrook 川にかかる橋の下に隠れた。王を見失ったデーン兵たちはその橋のすぐ近くの教

会から出てきた、式を挙げたばかりの新婚夫婦に、王を見なかったか、と尋ねた。その時、王の拍車が光り、それに気付いた夫婦は、橋の下に誰がいるようだと行ってしまふ。これによってエドモンド王は捕えられ、殺されることになる。王は処刑場に連れて行かれる前に、この教会で式を挙げようとする花嫁がこの橋を渡ったときには代々にわたって呪いをかけよう、と言いつ残す。ここから伝説が生まれ、この橋 Goldbrook Bridge はその後何回も架け替えられてきたのであるが、教会で式を挙げる新婚夫婦は祟りを恐れてこの橋を渡らなくなったのである。(現在の橋は1878年に架けられた橋である。)Julian Tennyson はその著 *Suffolk Scene* (1939)の中で、地元の古老の話として以下のように伝えている。



Time the Deens took pore young
Edmund orf from the bridge he went
an laid a cuss on all young chaps
an gals what'd iver parss that way a
going to git marrerd, ... (p.147)

(橋を支える石の柱には “King
Edmund Taken Prisoner Here
A.D.870” の文字が刻まれている。



さらに、Suffolk 州の州議会は2005年11月20日の St. Edmund's Day に、橋のすぐ手前に先ほどと同じことを記した小さな道標を設置した。(左の写真参照))

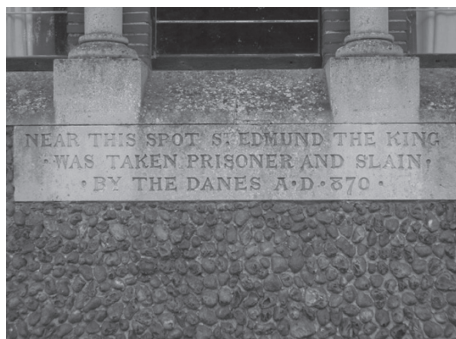
面白いことに、エドモンド王が橋の下に隠れている様を描いたレリーフがこの町にある。橋から南にほんの30mくらい行っところの集会場の屋根側面を見てみると、写真



のような丸型の浮彫り細工がある。そして、そのすぐ上の屋根の棟の部分には王の像が橋を見下ろすように立っている。今は集会場となっているこの場所が、実はあの新婚夫婦が式を挙げた教会があった場所である。また、このレリーフがある側面の窓の下には次のような言葉が書かれている。

Near This Spot St Edmund The King Was Taken Prisoner And Slain By The Danes
A.D.870 (下の写真参照)

さて、捕らえられた王はこの場所から数百メートル離れたところにある森に連れて行かれ、その中の地面にしっかりと根を下ろした1本の樫の木にきつく結わかれ、何度も何度も鞭で打たれた。(今はその樫の木はないが、その後、次のページの写真が示すようにその場所には記念碑が建てられている。) 異教徒である



ヴァイキングを前に、鞭で打たれるたびに敬虔なキリスト教徒でもあったエドモンド王はイエス・キリストを賛美したという。斬首の刑に処されたが、遺体は埋葬されなかった。地元の人々は首から下の胴体を見つけたが、頭部はそこにはなかった。狼(エドモンド

王が飼っていた狩猟犬という説もある) の遠吠えを聞き、行ってみるとそこに王の頭部があった。遺体と頭部を急ごしらえの礼拝堂に安置したとき奇跡が起きたという。礼拝堂の上に光が輝き、目の見えない者や病人が治った。王の頭部は胴体にくっつき、傷跡が赤く残っただけだった。遺骸は腐敗することはない。彼は殉教者となり、聖人となり、30年後、Bedericsworth という町に埋葬された。町はその後、St Edmund's Town を経て、Bury St Edmunds という名前の町になった。1020年に修道院が建てられ、1198年に遺骸はそこへ移された。



上の写真はエドモンド王が結わいつけられた樫の木があった場所を示す記念碑で、十字架の下部の側面には "Oak Tree Fell Aug. 1843 By Its Own Weight " と記されている。この樫の木が朽ちた時には、この木の中からエドモンド王を射った時に使われた鏃が見つかったとされる。樫の木はイギリスの代表的な木であり、国樹となっている。木が硬いということから、不死、忍耐の象徴でもある。キリスト教では、逆境に耐える十字架の木のイメージがあり、キリスト教徒でもあったエドモンド王が最期を遂げるときに使われた木が樫の木であったことも象徴的である。

East Anglia 最後の王である King Edmund、死後多くの奇跡を残し、聖人に祀り上げられた王だが、彼に関する文献は少ない。(ヴァイキングは家々や修道院に火を放ったということも多々あり、文献の焼失につながった。) 概して、イギリス人はエドモンド王を勇敢で偉大な王として好意的に見ているが、Bernard Cornwall 著 *The Last Kingdom* (2004) の中での扱いは全く逆である。

And he (= King Edmund) was quite dead by then. He was bloodied, his white skin red-

laced, open-mouthed and dead. His god had failed him miserably. Nowadays, of course, that story is never told, instead children learn how brave Saint Edmund stood up to the Danes, demanded their conversion and was murdered. So now he is a martyr and saint, warbling happily in heaven, but the truth is that he was a fool and talked himself into martyrdom. ...



Hoxne には Hoxne Church という教会があり訪れたが、そこの墓地から通りへ抜けるところで、最近ではあまり見られなくなった屋根付き墓地門があったので撮影した。(左の写真参照) 英語ではこういった門を lychgate (lichgate という綴り字もあり、lych または lich は「死体」を意味する古英語 lic から来ている) と言い、司祭がそこで弔いの礼拝を行うとか、また、例えば、埋葬する墓を掘っているときに布に包まれた遺体や棺を一時的に置くことができる、雨が降っても大丈夫

のように屋根の付いた門のことである。15 世紀くらいから教会の裏門としての機能を果たすべく建てられてきたが、最近では古くなって朽ちても、また取り壊されても、建て替えられることはほとんどなく、その数は減っていく一方である。



2-3. Bury St Edmunds

上述のように、エドモンド王が祀られている町であり、中心に Bury St Edmunds Cathedral (左の写真。右後方に見えるのが大聖堂) がある。11 世紀中頃までは、この大聖堂がある場所には教会が建っていた。そしてその教会

に取って代わって 16 世紀頃から大聖堂建築が始まり、今もその一部で改築や改装が行われているということである。この大聖堂の広大な裏庭にはエドモンド王が埋葬されていた修道院跡がある。(右の写真)



2-4. West Stow Anglo-Saxon Village

Bury St Edmunds 市の北にある West Stow Anglo-Saxon Village は、この地に西暦 420 年頃から住み着いたアングロ・サクソン人の一部族の遺跡をもとに、当時の住まいや暮らしを再現した一種のテーマパークである。Stow という言葉はゲルマン語で、「特別な場所 (a special place)」を意味する。園内に入ると、当時の模様に復元された家が数軒あり、ゲルマン人に扮した人たちが我々の質問に答えてくれる。遺跡をもとに建てられた家々であるが、彼らの説明では、柱があったとされる場所は分かっているので柱の位置は正確だが、実はその上の部分は現存していないので、こういう風なものであったのだろうという推測で建てられているとのことである。また、1500 年ほど前の人々がどのように調理し、何を食べていたのかなど、当時の服装を着た人々によって説明や実演がなされていた。Stow の周りにはフェンス跡や堀も発見されていないので、5 世紀から 7 世紀くらいまでは非常に平和な暮らしをしていたと考えられている。また、田畑や道などは彼らが来る前にいたローマ人たちが作ってくれたものがあったのでそれらをそのまま利用していた。



3. ノルマン人関係

3-1. Reading: Bayeux Tapestry

Reading 市の市庁舎に隣接する博物館 the Museum of Reading には「ノルマン人の征服」の戦を描いた刺繍「バイユー・タペストリー」がある。残念ながら、このタペストリーは本物ではなく、レプリカ（複製）であるが、イギリスの歴史を



描いたこのタペストリーの実物がイギリスにはなくフランス北部のバイユーの博物館にあるということから、イギリスに同じものを持ちたいという考えもあって、1885 年、Leek Embroidery Society（リーク刺繍協会）所属のイギリス人刺繍家 35 人が実物や

色付けされた写真を見ながらほぼ正確に復元したタペストリーである。館内 2 階にある 2 部屋の壁面にガラスケースに入ったタペストリーが掛けられている。実物は長さ 70m、幅 51cm であるが、この博物館に所蔵されているものは、長さは同じで、幅がプラス 8cm くらいあり、その部分に刺繍を担当した人の名前が示されている。国内だけではなく、海外でも有名になり、ドイツ、アメリカにも貸し出されたことがある。（館内では写真撮影が禁止のため、展示室を示す下の写真はこの博物館のホームページより。〈 <http://www.readingmuseum.org.uk/galleries/bayeux.htm> 〉）



このタペストリー制作は、ノルマン人の征服後まもなく、征服者ウィリアムの異父弟 Odo の命令で行われたと考えられている。(ウィリアムの妻とその友人たちによる制作という説もあったが、Odo によって建てられた Bayeux Cathedral で発見されたということ、また、1070 年代に建設されたその cathedral に献呈されるために作られた、という理由から今では上述のように Odo の命令によるものと考えられている。) また、制作地であるが、征服後の Odo は Kent に渡ったこともあり、また、染色のための材料に野菜が使われており、それが Kent で織られた衣装にも使われていることから、イギリスの Kent で制作されたものだと考えられている。タペストリーにはほぼ時系列で 79 の場面が 8 色の糸を使って描かれおり、また、それぞれのシーンの上にはラテン語で説明が添えられている。最初の場面は、1066 年のヘイスティングズの戦い (Battle of Hastings) の 2 年前、1064 年、時の王エドワード懺悔王とハロルドが語り合っている場面である。ハロルドは北フランスへ渡ったことがあったが、その折、ノルマンディ北部の町で、ガイ伯爵に捕らえられてしまう。その後、ガイ伯爵はウィリアム公爵の命令のもとハロルドを解放する。ハロルドはウィリアムに感謝し、王位継承の時にはその位をウィリアムに譲ると約束してしまう。このことから、ハロルドが国王になったとき、約束が違うということで攻め入って始まったのがヘイスティングズ市の北に位置するバトルで行われた戦いであった。

次の写真もこの博物館のホームページからだが、非常に有名な場面で、このタペストリーのクライマックスでもある。1066 年 10 月 14 日、その 4 日前まで北部 Yorkshire の Stamford Bridge でヴァイキングを相手に Harold 軍は戦っていたのであるが、William が攻め入ることを聞き、3 日で南部 Battle へ急行したわけである。この強行軍は大いに彼の部隊を疲れさせたことは間違いない。矢が目突き刺さったハロルドは、その後減多切りにされ、最期を遂げることになる。(矢は後に描かれたという説もある。矢と目のシンボルの意味に、偽証者は武器が目突き刺さって死ぬ、というものがあるので、この矢が後に書き足されたと考えてもおかしくはない。)



Reading 博物館のこのタペストリーの下には刺繍絵の解説が付いている。70m にもおよぶタペストリーの解説を読んでいくと、戦いが始まる数年前から戦いが終わるまでの2年間のイギリスやフランス北部・ノルマンディ地方のことがよく分かる。また、刺繍絵であるから、その当時の兵士の身なりや武器がどうであったかが視覚的に理解できる。ただし全てが正確に描かれているかどうかについては、例えば、この時代の別の絵では兵士が手袋をして戦うものも残っているのに対し、このタペストリーでは素手で描かれている、などから疑問を投げかける研究者もいる。

3-2. Battle of Hastings

バイユー・タペストリーに描かれている戦いが実際に行われた舞台は、ロンドンから南におよそ100km行ったところにある Battle である。1066年9月28日、ウィリアム率いるノルマン軍は現在の Pevensey Bay 辺りから上陸し、東へ進路をとり、Hastings（下の写真は Hastings の海岸）から Battle へと向かった。10月14日の戦いは朝から始まり、軍勢はそれぞれ6千から7千で規模はほぼ同じであり、その戦いはタペストリーに描かれているように壮絶を極めた。長い1日と



なったが、指揮官であるハロルド王の死を聞いた兵士たちが逃げ、その日のうちに戦いは終わった。

現在、古戦場 (battlefield) は National Trust が管理しており、Battle Abbey から古戦場のほぼ全体を歩いて見渡せるようになっ

ている。以下の2枚の写真は、古戦場と説明用のパネルであるが、「夏草や兵ど
もが夢の跡」ではないが、当時の模様を描いた絵を見て、そのまま視線を上げら
ると、眼前には絵と同じ風景があるのだが、兵士のいない平和でのどかな牧歌的な
景色が広がっており、隔世の感に打たれた。



この古戦場の敷地内には Battle Abbey School（下の写真の右奥）があり、学生
たちはイギリスの歴史の重要な一部と隣りあわせの中で学んでいるのであるが、
そういった環境を羨ましく思うと同時に、この戦い以降、ブリテン島はノルマン
人に支配されフランス語が公用語となり、それが296年間続くわけだが、ここで



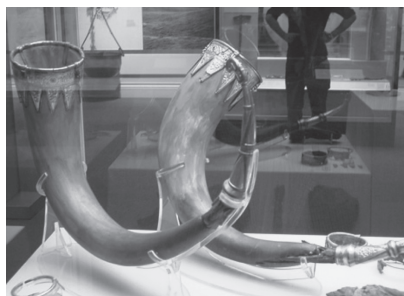
学んでいる学生はどのようにそれを
考えるか、聞いてみたくもなった。こ
の学校の校舎は13世紀に建てられた
修道院長の館と修道院を使っており、
校舎の新しい部分でも16世紀に建て
られたもので、歴史的に価値ある遺産
を教育の場に活用しているのである。

3-3. その他

ロンドンでは、大英図書館と博物館に行ったが、図書館では展示室で The
Gutenberg Bible (1454 - 55)、The Canterbury Tales の写本 (c.1410)、11世紀初頭の
Beowulf や各時代の聖書、その他を見たが、印刷術の導入がその後の社会に与え
た影響は計り知れないものがあり、そのことを説明したパネルには以下のような
文面があった。

Printing in the West: People were struck by the speed and accuracy with which books could now be produced. In 1475 a Bishop explained that three printers working for three months had produced 300 copies of one work, each copy consisting of 366 leaves. It would have taken three professional scribes all their lives to complete the same number of copies.

大英博物館では、英国関係の展示物を中心に見たが、Franks Casket（下の左の写真）、East Anglia 王国の墓地で発掘されたサットン・フーの副葬品、器やグラスとして使われていた数々の角（horn）などを見た。



角製の容器は6世紀頃のもので、祝宴用の杯として使われていたものという。今は絶滅したとされる大型の牛の角でできており、外側には飾りがいくつかついているが、その後の修理などで付け加えられたものもあるということである。

また、今回宿泊した Battle 近くの町 Sedlescombe であるが、語尾の -combe は辞書では、combe、comb、coomb (e) の項に、ケルト語起源で「険しく深い谷；山腹の谷」とあり、地形から名付けられた地名ということがわかる。実際、イギリスには、「険しい」場所かどうかは別にして、Sedlescombe をはじめ、Abbas Combe、Templecombe、Wiveliscombe、Burliescombe など -combe が付く地名が多い。そしてその発音だが、辞書の発音記号では /ku:m, koum/ しか載せていないが、Sedlescombe は /sedlsku:m/ ではなく、/sedlskɔmb/ であることを地元の人が教えてくれた。最後の部分は正に「コンブ」と発音するかのごとくである。

4. おわりに

イギリスの言語史に大きな影響を与えた2つの民族、ゲルマン人とノルマン人を中心に、彼らが残した足跡を辿る旅をしてきた。今回の旅がイギリス南部に限られたこともあり、ヴァイキングについては King Edmund との関係でしか見ることができなかったが、彼らの影響は実は英語史においては非常に大きなものがある。ヴァイキングはブリテン島を南下する中で、Northumbria、East Anglia のゲルマン王国を次々と滅ぼし、後は Wessex の Alfred だけというところまできていた。しかし、南部で一進一退の戦いを強いられたヴァイキングはアルフレッド王との間に協定を結ぶことになる。つまり、イングランド南部の支配を諦め、ワトリング街道以北へと退却することになるのである。そして、その地 Danelaw で 100 年、200 年と暮らす中で、語彙、代名詞、文法等、英語に様々な影響を与えていった。また、彼らの存在を示す地名も多くあり、地名の考察も英語史の重要なテーマであるので、いつか取り上げたいと考えている。

ウィリアム王率いるノルマン人の来寇は、彼らの言語であるフランス語をブリテン島にもたらした。この影響も語彙の点で大きく、フランス語のみならず、ラテン語などが多く英語に入るきっかけとなった。言語と言語の衝突は新しい言語体系や語を生み出し、人々の考え方、生き方を変えることとなった。そして、このことはまた新たな言葉を必要とするという循環を繰り返すことになり、英語はその後も大きく変化していくことになる。英語史の旅にはどうしても他民族の出会いが重要な鍵となってくる所以である。

参考文献

Andrew Bridgeford, *1066: The Hidden History of the Bayeux Tapestry* (London: Fourth Estate, 2004)

Bernard Cornwall, *The Last Kingdom* (London, Harper Collins Publishers, 2004)

Christopher Gravett, *Hastings 1066, The Fall of Saxon England* (Oxford, Osprey Publishing, 1992)

David Howarth, *The Year of the Conquest* (London, Penguin Books, 1993)

Julian Tennyson, *Suffolk Scene* (London and Glasgow, Blackie & Sun Limited, 1939)

Lucien Musset, *The Bayeux Tapestry*, translated by Richard Rex (New York: Boydell Press, 2005)